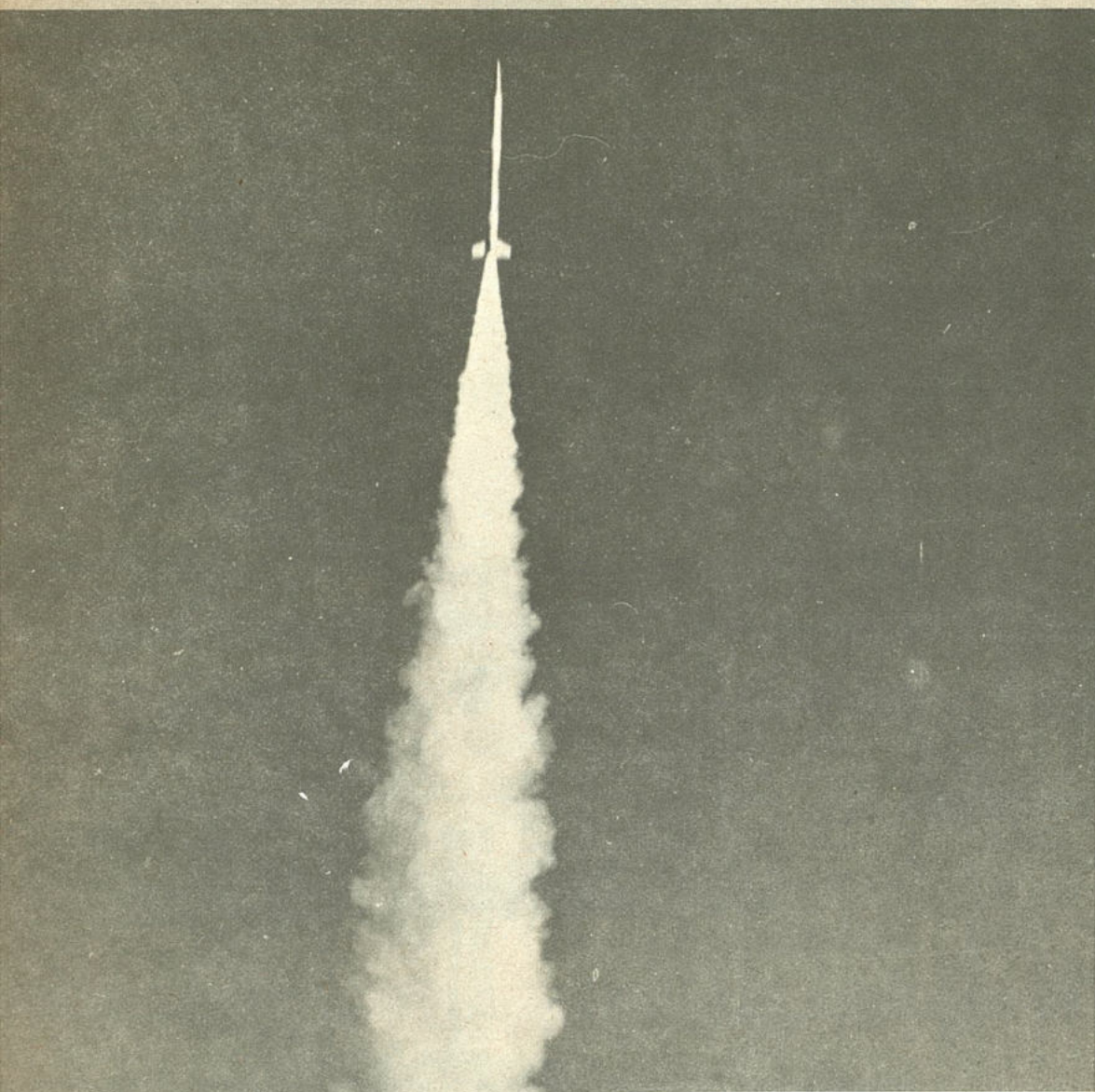
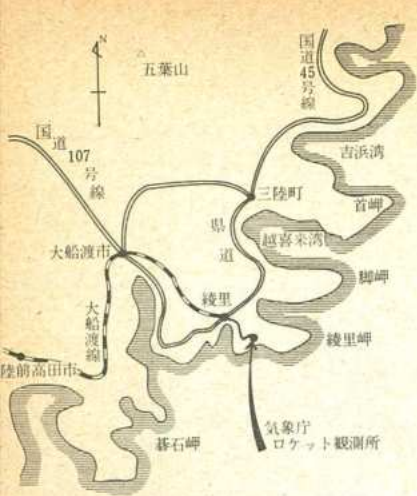


極東地域にはじめての

ロケット気象観測

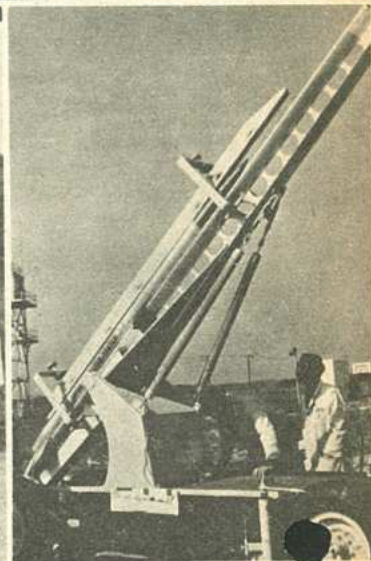
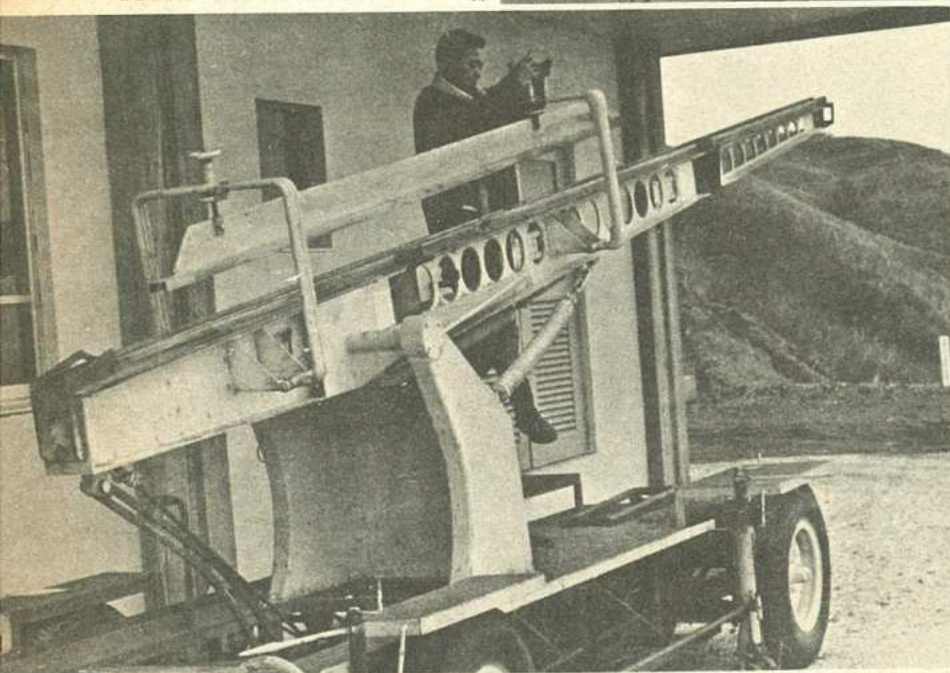
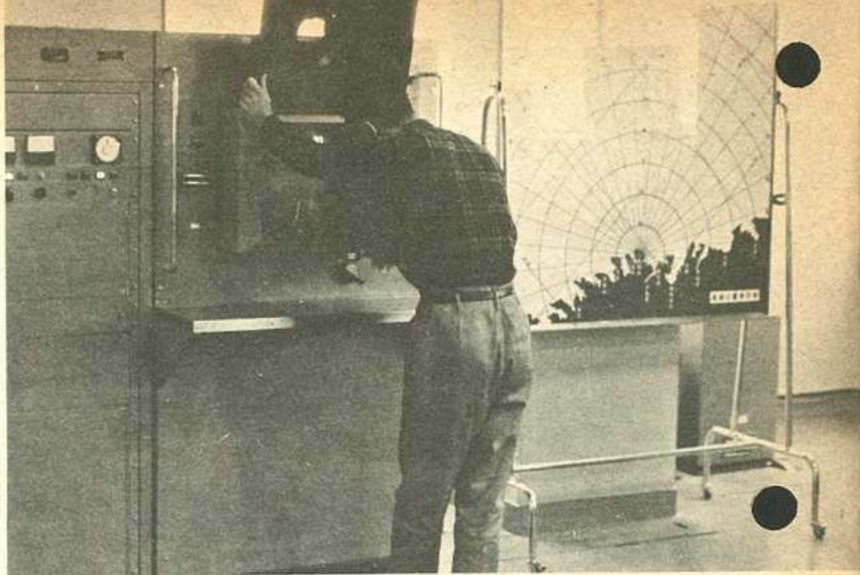
三陸町綾里で7月から本格化



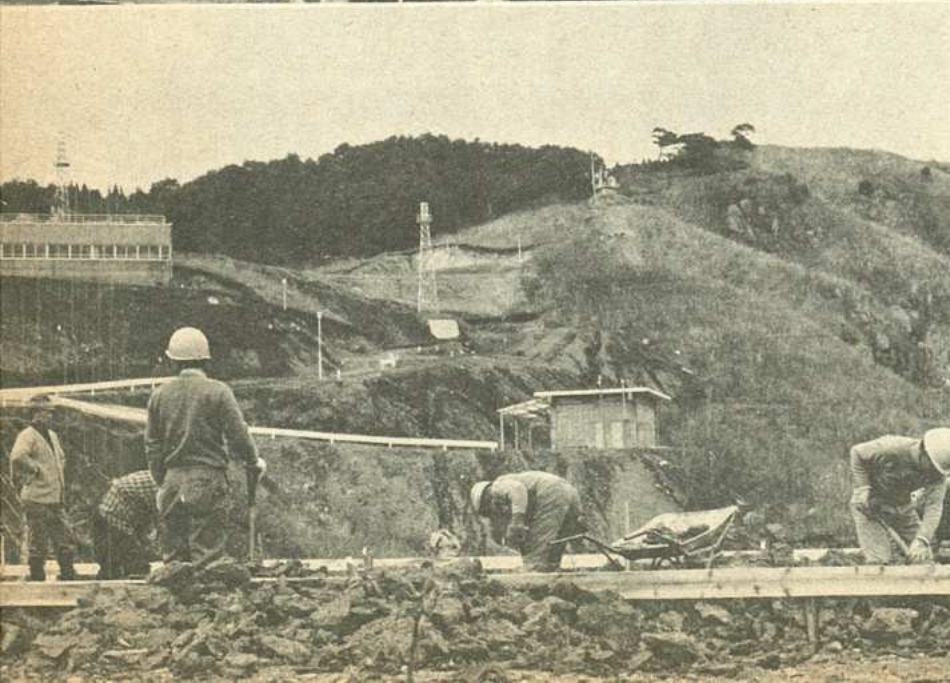


発射に先だって、レーダーで沖合の漁船が退避したか確認する。

晴れの日を待ってランチャー（発射台）を整備する所員。

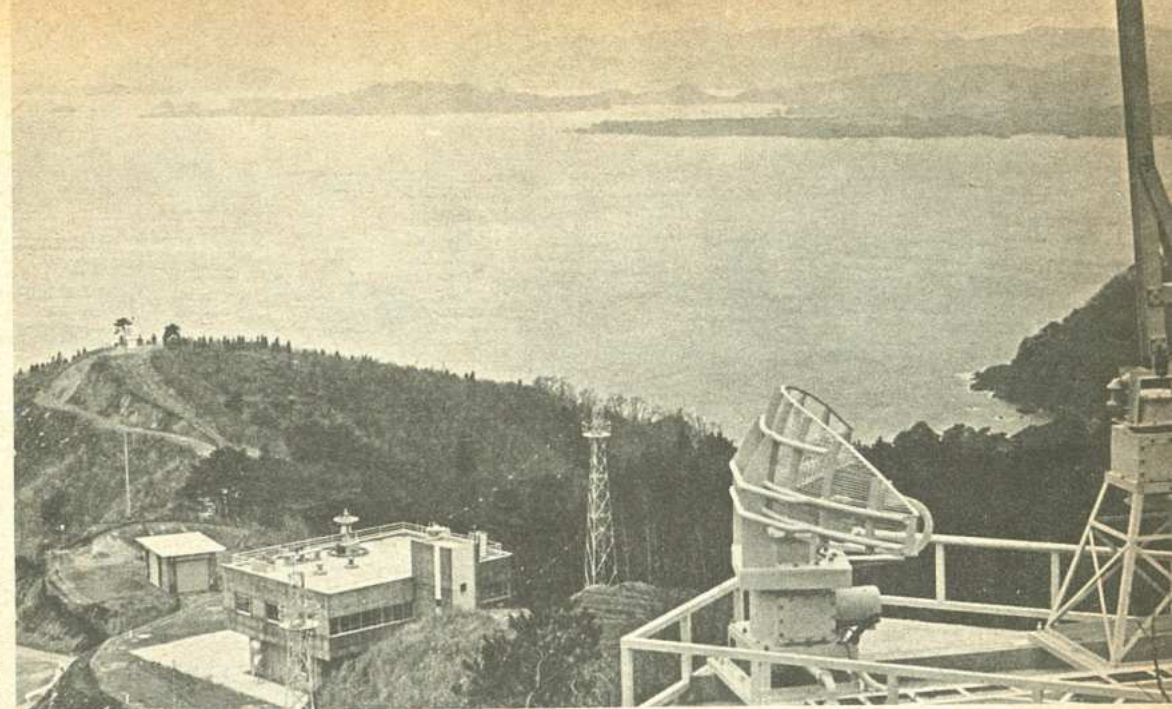


ロケット頭部には、プラスチックの砲弾型ケースの中に気象観測のロケットゾンデとパラシュートが入っている。



発射場づくりに最後の追いまがかけられている。

大船渡湾の外海に面した観測所。手前がレーダー塔、観測庁舎の前に気球充てん室、その向うの丘の上に光学観測室が見える。



長期予報確立に貢献

地震観測や海洋生物の研究などの施設があり、「科学の町」をめざす気仙郡三陸町に、また新たなトビックスがもたらされた。わが国はもちろん、極東地域でもはじめての気象専門の観測ロケットが七月から打上げ開始になるといわれている。場所は、坂道を、綾里の町から綾里岬に向けて約九。海に面した斜面がきりひらかれて、すでに観測庁舎や保安事務所、ロケット組立室、気球充てん室、ロケット格納庫、光学観測室、レーダー塔などが完成。目下、ロケット発射場づくりが急がれている。

長期予報を確立するうえでどうしても大切なことは、高層の気象条件を観測することとされる。げんざい気象庁では全国十二カ所に気球による観測所を設けて毎日観測しているが、気球の昇れるのは地上二十五。いどまで。これでは気象変化の大部分となる太陽熱の観測に不十分なところから、成層圏（地上十五〜五十）のものと上の部分（成層止圏）の様子を知ろうというもの。

ロケットはMT135Pと呼ばれ直径十三・五、長さ三・三、本体の値段は約二百万円といわれる。打上げ後百十四秒ほどで地上六十に達し、観測部分とエンジン部分が切り離され、それぞれパラシュートによってゆっくり、約二時間かかってここから約六十。沖合いの海面に落下。この間、時々刻々、気象条件を電波で観測所に知らせられるしくみになっている。七月からは一週間おき、明年一月からは毎週（原則として水曜、午前十一時）打上げが予定されているが、同観測所の犬飼技官は、「従来、鹿児島県内之浦の東大宇宙空間観測所の施設を使って打上げていたが、観測機械もぜんぶここに持ってきてある。この観測がスタートすれば、季節予報のような長期の予報の精度を高める役割りは大きい」と語っていた。

観測機器はぜんぶ、鹿児島の内之浦からここに移された。

